

静岡大学教育学部附属静岡小学校
研究紀要

その子らしく学ぶ

Research Bulletin
of
Affiliated Shizuoka Elementary School
Faculty of Education
Shizuoka University



は　じ　め　に

日頃より、静岡大学教育学部附属静岡小学校の教育、研究にご理解ご協力いただき誠にありがとうございます。このたび、研究の一端を研究紀要という形で発表させていただきました。忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いです。

本校は、『自らをきりひらく』を学校教育目標に掲げ、「開拓と創造」につながる一人の人間としての理想像「自らの道、自らの将来、自らの運命などを自分の力できりひらくこと」、「前途やその周辺に存在するあらゆるものをよく見極め、これからの自己の向上や周囲の改善に資すること」を目指してきました。

今、私たちの生活様式は、政治・経済・社会のグローバル化や急速な情報化により、質的にも量的にも変化し、A I（人工知能）の進化は、人間の思考がついていけないのではという危機感すら感じる状況です。立ち止まって、自分はどうかありたいのかを考えないと、自分を見失ってしまうのではないかとさえ思えてきます。だからこそ、自分の力で生きていくことの意味を考えていくことが大切になってくると思います。これは、本校の学校教育目標『自らをきりひらく』に通じることといえます。

学校教育全般に渡って、子どもたちの『自らをきりひらく』教育は行われますが、授業を通して私たちができることを考えるのが教育研究の土俵だといえます。本校は永きに渡り、子ども理解を基盤に据え、「子どもの学び」を問う研究を継続してきました。今までの研究で明らかにしてきた子どもの学びの履歴を積み重ねれば積み重ねるほど、子どもの学びの有り様は実に個性的かつ魅力的なものであり、さらに子どもの学びを追い求めたいという衝動に駆られます。

研究主題『その子らしく学ぶ』は、今年度、研究4年次を迎えます。1年次は、子どもにとっては、「その子らしさ」が広がり・深まる可能性が、教師にとっては『その子らしく学ぶ』に目を向けることで、子どもの「とらえ」が磨かれる可能性が見えてきました。2年次は「その子が自分と対象とを結びつけながら進んでいく」という見方で、『その子らしく学ぶ』を見つめてきました。その中で、『その子らしく学ぶ』子どもの「うまくいかなさ」を見つめていくことは、その子の「学び」を顕在化したものとして捉えられるようになること、子どもが心の動きを伴う経験をするには『その子らしく学ぶ』をより豊かにするのではないかということ、子どもが「自分の見方」を十分に働かせることで、教科の学びの獲得は保障されるのではないかということ、これら3つの関係性が見えてきました。3年次は「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」という視点をもって学びのプロセスを見てきた中で、心の動きの先には、その子と対象との結びつきの変化や、その子の思考の変化といった、その子の学びがさらに進んでいく様子や、子どもは教科の学びに加え、目的に向かう誠実性、自己調整や粘り強さ、他者に対する共感性を働かせている様子も見えてきました。

3年間の研究で見えてきたものから、4年次では「教科の学び」と「人間性の涵養につながる学び」との関連性を見出し、子どもにとっての学びが意味するものを明らかにしていきたいと考えています。

本校の研究につきまして、さまざまなご指導ご助言をいただきました協力員の先生方、共同研究者としてご協力くださいました静岡大学教育学部の先生方、附属静岡小学校OBの皆様方、その他多くの方々に深く感謝いたします。

令和7年3月

静岡大学教育学部附属静岡小学校
校 長　山　田　卓

目次

ま え が き	校長 山田 卓
I 研究総論（令和 6 年度）	2
II 教科主張・授業実践と分析	
(1) 国語科	8
(2) 社会科	24
(3) 算数科	40
(4) 理科	56
(5) 生活科	72
(6) 音楽科	84
(7) 家庭科	100
(8) 図画工作科	108
(9) 体育科	122
III 研究 3 年次の実践から	138
IV 研 究 同 人	142
あ と が き	教頭 小松 稔幸

I 研究総論（令和 6 年度）

令和6年度 研究総論

研究主題

その子らしく学ぶ

1 はじめに

その子がその子らしく生き、彩りあふれる自分や豊かで幸せな未来を、自らつくってほしい。私たちは子ども一人ひとりにそのような願いをもち、学校という場においてあらためて、子どもがその子らしさを輝かせながら学ぶ姿を支えたいと考えている。

私たちは「子どもは自らの内に伸びようとする芽をもっている」という子ども観に立ち、「とらえ・願い・かかわる」ことこそが、子どものもつ芽を支えるための教師の役割であると考えている。その出発点となる「とらえ」は、基礎的・基本的な知識・技能をいかに身につけているか、教科の見方・考え方を働かせているかということだけではなく、その子がいまをどのように生きているか、というその子ならではの見方や考え方、感じ方、価値観をみていくことである。子ども一人ひとりがその子らしさを表出しながら学び、その子らしさが磨かれていく営みは、その子の「とらえ」に基づくことで実現する、私たちの目指す教育である。目の前の子どもと、ともにつくる二つとない授業にこそ、真の学びが生まれるのだと考えている。

2 研究主題設定の理由 ～前研究『夢中になる』を経て～

先述した教育観のもと、私たちは前研究『夢中になる』において、「〇〇したい」の先にあるその子の目的に着目し、実践における子どものあらわれを分析してきた。その結果、『夢中になる』対象やタイミング、プロセスは当然子どもによって違いがあるものの、ときに、それらの夢中が影響し合い、子どもは、その子らしさをあらわにしながら語り合ったり表現し合ったりし、熱を帯びていくことが分かった。

私たちは、このようなその子らしさがあふれる姿に魅力を感じるとともに、その姿の背景に目を向け、子どもの内面に寄り添った研究を一層大切にしていきたいと強く考えるようになった。また、授業において、その子にとってその材との出会いがどのような意味をもつのか、その子に何を願ってそのかかわりをするのか、といった教師の役割の具体についても問い続けることの必要性を感じた。

これらのことから、研究主題を『その子らしく学ぶ』と設定し、目の前の子どもと真摯に向き合い、『その子らしく学ぶ』子どもを支えていくことで、子どもという存在がもつ可能性や在るべき教育の原理を追究する研究を進めていきたいと考えた。

3 研究1・2年次を経て見えてきたもの

(1) 研究主題『その子らしく学ぶ』確定までの経緯

研究1年次、『その子らしく学ぶ』という言葉のもつ可能性について広く捉え、研究主題として設定する価値について吟味していく必要があると考え、授業実践を行った。そして、抽出児の学びのプロセスを追い、『その子らしく学ぶ』を見つめていく中で、見えてきたものを以下に記す。

- ・子どもには、その子の見方や考え方、価値観などの、その子の背景にあるもの、その子をかたちづくるものなどが「その子らしさ」として存在し、それらが自然とにじみ出たり、それらを発揮したりしながら対象にはたらきかけ、目的に向かって前進していくこと
- ・子どもは、目の前の材や事象などの対象を、自分自身と結びつけ、意味付けながら学んでいくこと。そうして学びを自分のものにしていく中で得るものや、学びのプロセス自体が、「その子らしさ」として、その子に還っていくのではない
- ・『その子らしく学ぶ』に目を向けることで、教師自身の子どもの「とらえ」が磨かれ、より子どもを支えることができるのではない
- ・『その子らしく学ぶ』に着目することで、「その子がどう学んでいくか」といったプロセスに、より目を向けることができ、そうした先に、教科的な学びや人間性につながる学びを見出せるのではない
- ・前研究『夢中になる』が、子どもの目的に着目していくという特長をもったものであったことに對し、『その子らしく学ぶ』研究は、子どもの学びのプロセスをさらに広く追うことができるものなのではないか

これらのことから、『その子らしく学ぶ』を研究主題として確定し、研究を進めていく価値は十分にあるという考えに至った。

また、研究を進めていく上で、元来子どもがしているその子ならではの学びをまるごととらえながらも、子どもを支え、「子どもにとってのよさ」を追究していくために、私たちが目を向けていく『その子らしく学ぶ』を全体で共有することの必要性も感じた。そこで、各教科部で見えてきた『その子らしく学ぶ』を共有し、“その子が、自分と対象とを結びつけながら進んでいく”という共通の見方をおくこととした。

(2) 研究の可能性を広く深く探り、価値を見出していくために

研究2年次、このような見方をもって子どもの学びのプロセスを追うことで、『その子らしく学ぶ』研究の可能性を広く深く探り、研究の価値を見出そうとした。そして【4年社会科「汽笛よ再び～大井川鐵道がつなぐもの～（わたしたちの県のまちづくり）」】での子どもの姿から以下のことが見えてきた。

- 『その子らしく学ぶ』子どもの「うまくいかなさ」に目を向けていくことは、その子の「学び」を顕在化したものとして捉えられるようになる
- 対象となる人と出会い、心の動きを伴うような経験をすることは「その子らしさ」に還っていき、『その子らしく学ぶ』をより豊かなものにするのではない
- 子ども一人ひとりが「自分の見方」を充分に働かせることで、その教科における学びの獲得が保障されるのではない

これらの価値や可能性が、各教科の授業に向かう子どもの『その子らしく学ぶ』にも見られるのかについて検証していくとそれぞれのつながりが見えてきた。

子どもは、「その子らしさ」を表出しながら自分と対象とを結びつけて進んでいく中で「うまくいかなさ」などの状況と向き合うことになる。そうすると「自分の見方」を充分に働かせ、自分と対象との結びつきを強くしていく。このようなプロセスの中に生じる「心の動き」がきっかけとなりその子の思考や言動に変容が起こる。この一連

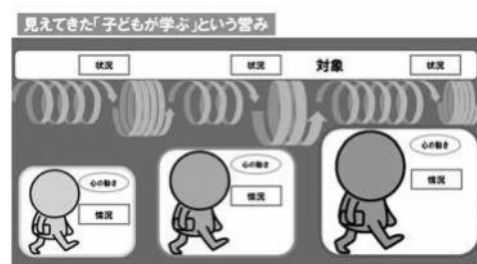


図1「子どもが学ぶ」という営み

のプロセスは、「子どもが学ぶとは、どういうことなのか」という問いにも、一定の解を提示するものになると考えた。(図1)

こうして見出した価値や可能性の中でも『その子らしく学ぶ』子どもの「心の動きを伴う経験」に着目していくことが、子どもの学びの解像度を上げることに繋がるのではないかと考えた。

4 研究3年次 ～研究授業(R6 1、2月の実践)から見てきたこと～

研究3年次の初めとして【1年生活科「スティックでステキな遊び場づくり(自然や物を使った遊び)】」の実践を行った。生活科の授業における『その子らしく学ぶ』子どもの「心の動きを伴う経験」を視点に分析していき、その経験によって「その子に還るもの」があるのかを考察していくこととした。ひいてはそれが「子どもにとってのよさ」という『その子らしく学ぶ』における価値となり得るものの検証につながるのではないかと考えた。

本実践の導入で、子どもはスティックとジョイントによって構成された空間に出合った。(図2)そして自分専用のスティック24本とジョイント17個を渡されると、自分のつくりたい空間に向けて個人で組み立てたり仲間と協働したりして動き出していった。

単元の初めA子は、自分専用のスティックとジョイントを渡されると「やっぱ大きいお家がいいよね」などと仲間に声をかけ、思いついた繋ぎ方を次々にやってみながら空間づくりに向かっていった。その中で、空間をつくるためのスティックとジョイントの使い方を感得したり、限られたスティックの使いどころを吟味したりしていった。こうして、空間づくりのおもしろさにふれていったことで、「スティックとジョイントで楽しみたい」という思いが膨らんだ彼女は、出来上がった空間を「私の部屋」「寝る部屋」「温泉」「運動場」などに見立て、ごっこ遊びを楽しんだり、その空間からさらにイメージを膨らめてつくり変えたりするなど、「遊ぶ」と「つくる」を往還しながら活動にのめり込んでいった。



図2 子どもが出合った空間

単元中盤に、新聞紙を使って空間を仕切る子どものアイディアが全体で共有されると、彼女は(よりよい空間にできそう)という期待感をもったのか、「修理しよ、早く!」と一緒に活動する仲間に声をかけ、空間をより立体的なものへつくり変えていった。すると、彼女の中で、空間での過ごし方やそのための工夫などやりたいことが生まれてきたのか、次時には多くの材料を持参した。そして、彼女が中心となって「ここは絨毯。ここは壁ね」と配置を決めていった。しかし、仲間が家から持ってきた銀色のシートをめぐっては、その配置について意見が分かれ、床に敷きたい彼女に対し、仲間は天井として覆いかぶせたいと主張した。覆うことによって空間が壊れてしまうことを心配していた彼女だったが、他の仲間の「テントみたいにしよう」という提案に対し、葛藤しながらも銀色のシートで覆うことを受け入れた。また、彼女が持参した毛糸を、仲間と一緒に「パーティーみたい」と言いながら、飾りつけるように空間内に張り巡らせた。そして、その毛糸に触れてはいけないレーザーに見立て、「レーザー屋さん」を始め、その空間に他のグループの仲間を招くようになった。

こうして進んできたA子は、単元終盤に自分たち以外の仲間を招いた際に、招待状に見立てた紙を渡した。それがきっかけとなり、グループの仲間から招待状づくりを提案され、一緒になって向かっていった。おそらく「みんなで楽しむこと」を大切にしたい彼女の思いとも重なったのだろう。完成した招待状を渡して歩き、多くの仲間が彼女たちのつくった空間に遊びにやってきましたり、彼女たちも他の空間に招かれたりした。招き入れる彼女も招かれる彼女も充実感を味わっているような表情だったのは、「仲間と協働することのよさ」をあらためて実感したからだろう。

B 男は、授業者が提示した空間に出合うと「この棒使ってさあ、家大きくできるんじゃない？」と先行経験をもとに思考し、「お城を作ろう」「完全完璧のお城」と広さと頑丈さのある空間を目指して仲間と協働し始めた。しかし初めは、各々が思い思いに組み立てたせいか、「お城」の捉えのズレが頻発し思いの衝突が多く、彼は広さに対する満足感を味わうに留まった。場が一度リセットされ、一から空間をつくる機会が設定されると、「まず横広げろ」「図書館ルーム作る？」と仲間と対話をして空間の基礎からつくり、広さや頑丈さを保ちながら組むようになった。そして出来上がった空間を見て、その広さと頑丈さの両立ができたことに達成感を味わっていた。このようにして満足感や達成感を味わった彼は、空間の一部をペットショップやスポーツ場と見立て、その空間での遊びも仲間と楽しむようになった。

単元中盤からは、つくった空間を残していくことを伝えられ、これまでの半分の 45 分間での活動が三度続いた。彼は「あと 28 分しかない」などと、限られた時間内で空間づくりと遊びに向かおうと、仲間が用意した設計図に従いながら合理的に進めたり協働する仲間を限定することで共有を図りやすくしたりするようになった。そして三度目には「じゃあ俺ラーメン屋の看板（暖簾）作るわ」とこれまでで最も明確なビジョンをもって活動していった。その中で、つくりたいものについて仲間と対話したり、実際に試したりしながら目指す空間づくりに夢中になっていった。しかし、次時の冒頭では、彼が空間を離れた少しの間に仲間がテントづくりを敢行し、急な方向転換を迫られてしまった。初めは見通しがもてずに目の前の空間や仲間に対する関わり方を模索していたが、テントの骨組みができたことを確認すると、そこからは新聞紙で屋根を貼っていくという見通しをもって再び空間づくりに向かうようになった。そして、完成した空間に入ると「気持ちいいなあ、静か」と閉塞感のある空間の魅力を味わっていた。

単元終盤になっても「俺は、誰も入れねえぜ」と自分たちのための空間をつくり続けていると、A 子から招待状を受け取った。「パーティー招待された」と『その子らしく学ぶ』A 子の空間の見方にふれた B 男は「A 子招待しよう」「A 子入っていいよ」「A 子この奥行ってごらん」と、自分のつくった空間に他のグループの仲間を招き入れる喜びを実感するに至った。

このように、『その子らしく学ぶ』子どもの「心の動きを伴う経験」に着目していくと、「心の動き」は確かに「その子らしさ」に起因しており、「心の動き」のつながりを見つめていくと、空間への認識の広がりや他者理解の促進などが「その子に還るもの」として見出すことができた。

これらのことから、「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」を研究の視点としていくことは、本研究をより価値あるものに前進させていくと考えた。

5 おわりに

研究 3 年次は、各教科部の実践を通して『その子らしく学ぶ』研究の価値をより確かなものにしていくことを目指す。子どもの学びのプロセスに「心の動きを伴う経験」は確かにあり、「心の動き」には「その子らしさ」が強く関係していることが明らかになった。引き続き研究の視点を明確にもち、その子にとっての「心の動きを伴う経験」の具体を見出すとともに、その経験によって「その子に還るもの」をより明らかにしていきたい。そして、何より私たちは、教師として『その子らしく学ぶ』子どもと向き合うことを大切にしながら進んでいきたい。